

『世界旅行 萬國名所圖繪』の復刻と

同書に関する覚え書き

荒 山 正 彦

はじめに

近代ツーリズムに関わるさまざまな文献資料の復刻が、近年数多くすすめられている。たとえば、東京の出版社エディション・シナプス Edition Synapse からは、二〇〇八年以降、Modern Tourism Library Series として、『An Official Guide to Eastern Asia (『東亜英文旅行案内』)』、『Cyclopaedia of Modern Travel (『一九世紀世界旅行百科』)』、『The Emergence of the World Tour: A Collection of Early Travel Guides and Handbooks (『世界周遊旅行の始まり・英文旅行ガイド・ハンドブック復刻集成』)』、『The Boy Travellers in the Far East (『アメリカ少年の旅した一九世紀の日本・中国・アジア・アフリカ』)』という近代ツーリズムに関する四つの文献資料が復刻されてきた。そして二〇一二年には、本稿でとりあげる『世界旅行 萬國名所圖繪』全七巻＋世界地図(明治一八年・一八八五～明治二〇年・一八八七)が、シリーズ五番目の企画として復刻された。

まずは復刻の形式について簡単に整理しておきたい。オリジナルの『世界旅行 萬國名所圖繪』は、明治一八(一

八八五)年から翌明治一九(一八八六)年にかけて刊行された全七卷からなる本編と、付録として明治二〇(一八八七)年に発行された一枚ものの世界地図「世界旅行 萬國全地圖」から構成されている。本編はA6判の洋装本であり、また添付された地図は六七センチメートル×四五センチメートルでA2判よりもわずかに大きい。このたびの復刻にあたっては、本編は約二〇パーセント拡大され、B6判サイズで刊行された。これによって、やや小さくて読み取りにくかったオリジナルの文字と図版は**ずいぶん読みやすくなった**。また一枚ものの世界地図は、オリジナルのサイズのままで復刻された。全七巻の本編は内容の順番はそのまま全四巻に合本され、**世界地図は復刻第四巻の巻末に添付された**。

原本となる『世界旅行 萬國名所圖繪』全七巻と地図を揃って所蔵する図書館は必ずしも多くはなく、またこれまでも同書を対象とした先行研究も管見の限りでは**みあたらない**。そこで本稿では、今回の復刻が同書を研究資料として活用するひとつの画期ととらえ、以下の各点を明らかにし、今後の研究に資することを**目指したい**。すなわち本稿の目的は、(一)同書の概要を整理すること、(二)同書の刊行時である一九世紀後半における世界周遊旅行や世界一周旅行の系譜のなかに同書を位置づけること、(三)同書出版元の青木嵩山堂とその創業者青木恒三郎について記すこと、そして(四)同書出版にあたって参照された可能性の高い『米欧回覧実記』との関連性を指摘すること、である。

一 『世界旅行 萬國名所圖繪』の概要

『萬國名所圖繪』⁽⁴⁾は、タイトルに示されているように世界旅行の「名所図会」である。「名所図会」とは近世以降に発達した旅行案内の形式で、日本各地の名所・寺社・旧跡・景勝地の由来などを記した冊子本である。文字による情

報に加えて挿絵の比重が大きいことに特徴があり、近世における旅の大衆化と名所図会の普及には強い結びつきがあった。もつとも初期の名所図会は、安永九（一七八〇）年に刊行された秋里籬島著・竹原春朝齋画『都名所図会』とされており、その後も『江戸名所図会』や『摂津名所図会』などが各地で刊行された。名所図会には、あるひとつの地域を描いたものばかりではなく、『東海道名所図会』のように京都から江戸に至る東海道に沿って、各地の名所・寺社・祭礼・名物名産・景勝地が描かれ、東海道というルートに沿う旅行案内書として作製され利用されたものもあった。⁽⁵⁾そしてこの「名所図会」という手法は新しい明治の時代にも受け継がれた。本稿でとりあげる『萬國名所圖繪』には、後述のように合計八〇〇枚を超える銅版挿絵が用いられており、「名所図会」の系譜を引く旅行案内書であると言える。

さて、同書第一巻に収められた「緒言」によれば、「此書は数多き引用書籍を繙きつ或は近頃世界中周遊したる友に就きその実際の景状を親しく聞て（中略）恰も世界旅行者の日記の如く」書き綴られたものであり、その内容は世界各地の「風俗や人情政治宗教や學術技藝物産や名所古跡（中略）順路の里程船賃や汽車賃等に至るまで」の概略が記載されている。⁽⁶⁾すなわち同書は実際の世界旅行の経験に基づいて執筆されたのではなく、すでに刊行されたいくつかの書物を編輯したり、世界旅行を経験した知人からの伝聞によって編集・作製されている。

『萬國名所圖繪』で描かれる「世界旅行」とは、これも「緒言」によれば、旅行の起点となる東京を出発し、横浜港から太平洋航路を利用してハワイからアメリカ大陸にわたり、サンフランシスコからは大陸横断鉄道を利用してアメリカ合衆国を横断してニューヨークに至り、さらに大西洋を航海してヨーロッパやアフリカの各地を巡り、アジアから長崎・瀬戸内海・神戸を経て、同書出版元の大阪（青木嵩山堂）へ帰着するというものである。すなわち、日本から東回りに世界を一周する行程に沿ってこの世界旅行案内書は構成されているのである。

同書はこの旅程に沿って第一巻から第七巻まで順に刊行された。表1は第一巻から第七巻までそれぞれの出版年月、各巻のページ数、挿絵枚数、そして旅行案内の対象地域を一覧したものである。まずは出版年月をみると、第六巻から第七巻までの刊行に五か月間を有していることを除けば、第一巻から第六巻までは二〜三か月に一卷ずつが定期的に刊行されていることがわかる。この点だけをとりあげるならば、たいへん順調に全七巻が完結したようにみえるが、当初の出版計画と最終的な出版形態には若干違いがあることも事実であった。

第一巻に記された当初の出版計画によれば、明治一八（一八八五）年五月に第一巻が刊行されたのちには、隔月の刊行によって、アメリカ（第一巻）、ヨーロッパ（第二巻〜第四巻）、アフリカとアジア（第五巻）を対象とした全七巻で完結するはずであった。ところが実際には隔月での刊行とはならず、第四巻発行時に全五巻完結の予定が全七巻で完結することに変更されたと記された。全体のページ数は拡大したのであった。当初は第五巻においてアフリカとアジアの旅行案内を網羅することが予定されていたが、結果的には第五巻から第七巻までの三巻分をアフリカとアジア、そしてオセアニアの旅行案内に費やしている。また表1に記した各巻ごとのページ数をみると、第一巻と第二巻がそれぞれが一〇〇ページに満たないのに対して、第三巻以降は一〇〇ページを超え、そして巻を重ねるごとにページ数は増え、第七巻は第一巻の二・五倍のボリュームになっている。つまり、アメリカとヨーロッパの旅行案内は当初に予定されていた分量・ページ数にしたがって刊行されたものの、アフリカとアジアの旅行案内は当初の予定からかなり大幅な増加があり刊行されることがわかる。

次に挿絵について言及しておこう。前述のように『萬國名所圖繪』は、「名所図会」という伝統的な地誌の手法が用いられており、文章に加えて豊富な銅版挿絵が掲載されている。たとえば図1は第一巻四二ページの本文とニューヨーク・ブロードウェイストリートの挿絵、図2は第三巻一一ページの本文とパリ・コンコルド広場の挿絵である。

表1 『世界旅行 萬國名所圖繪』の巻別構成

	出版年月	頁数	挿絵	旅行案内の対象地域
第一巻	明治18年 5月	88	93	日本（東京・横浜）、サンドイッチ諸島（ハワイ）、北アメリカ（サンフランシスコ・大陸横断鉄道・ニューヨーク・ワシントン・ナイアガラの滝ほか）
第二巻	明治18年 8月	92	88	イギリス（リバプール・ロンドン・マンチェスター・ハイランドほか）、アイルランド、スペイン、ポルトガル、ジブラルタル、フランス（リヨン・マルセイユ）
第三巻	明治18年 10月	110	101	フランス（パリ）、ベルギー（ブリュッセルほか）、オランダ（ハーグ・アムステルダムほか）、ドイツ（ケルン・ハンブルク・ミュンヘンほか）、デンマーク、グリーンランド
第四巻	明治19年 1月	154	135	北極海、スウェーデン、ノルウェー、ロシア（サンクトペテルブルク・モスクワ）、トルコ、ギリシア、イタリア（ローマ・ボンベイ・フィレンツェほか）、オーストリア、スイス
第五巻	明治19年 4月	177	138	エジプト、スエズ運河、ソマリア、ヴィクトリアの滝、マダガスカル、南アフリカケープコロニー、ギニア、セネガル、サハラ砂漠、モロッコ、トリポリ、オセアニア、オーストラリア、小笠原諸島
第六巻	明治19年 7月	181	131	エーゲ海、エルサレム、ヨルダン、バグダッド、メッカ、ペルシア、イスファハン、アフガニスタン、カブール、ベンガル、ボンベイ、マドラス、カルカッタ、ベナレス、デリー、ラホール、カシミール、ラダック、ラサ
第七巻	明治19年 12月	224	145	ビルマ、マレー半島、シンガポール、バンコク、アユタヤ、ラオス、カンボジア、広東、香港、厦門、台湾、杭州、上海、天津、北京、南京、朝鮮、京城、長崎、瀬戸内海、神戸、大阪



図1 ブロードウェストリートの挿絵を含む第一巻42ページ



図2 コンコルド広場の挿絵を含む第三巻11ページ

『世界旅行 萬國名所圖繪』の復刻と同書に関する覚え書き

五二

『萬國名所圖繪』では、全七巻にわたってこうした銅版挿絵が数多く挿入されている。表1における各巻のページ数と挿絵枚数を見比べると、挿入されている銅版画は一ページから一・五ページにつき約一枚の割合である。この豊富な挿絵の存在が、同書の大々な特徴であると言えよう。

最後に、表1に列記した「旅行案内の対象地域」をみておきたい。およそ、第一巻は北アメリカ、第二巻から第四巻はヨーロッパ、第五巻はアフリカ・オセアニア、第六巻は西アジア・南アジア、そして第七巻が東南アジア・東アジアということになる。中南アメリカは含まれていないが、全体的な地域バランスは整っていると見るべきであろう。ただこの巻別構成において合計三巻で描かれたヨーロッパの構成には若干の疑問が残る。たとえばフランスの記述が第二巻（リヨンとマルセイユ）と第三巻（パリ）に分割されていることや、北欧や北極海、地中海といったまとまりのある地域の案内が、第三巻と

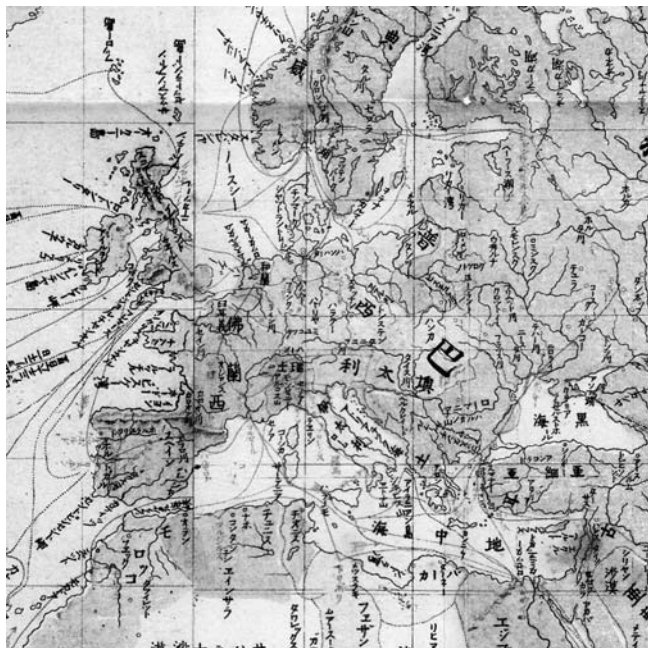


図3 「萬國全地圖」(部分)

第四卷にまたがっていることである。つまり、国家の領域や地域区分には必ずしも囚われることなく、巻別構成がつけられているのであるが、この点については本稿の第四章においてあらためて考察したいと考える。

ところで、本編刊行後に出版された地図「萬國全地圖」についても言及しておきたい。図3はこの世界図の一部分(ヨーロッパ)を転載したものである。「萬國全地圖」は本初子午線を中心として描かれた世界図で、平行する等間隔の経線と、やはり平行し高緯度地方にいくにしたがって間隔が広がる緯線を軸にしたメルカトル図法によって作製されている。メルカトル図法による世界図そのものは一六世紀にすでに描かれているが、日本においては近世末から作製され、本図は文久元(一八六一)年に作製された佐藤政養「新刊輿地全図」の系譜に属する世界図であると考えられる。⁷⁾

以上のように、明治一〇年代においてすでに日本語による世界旅行の案内書が刊行されていたことは注目すべき点である。その試みは日本における旅行の歴史において、もつとも初期のものである。この時期には、明治政府による

いわゆる欧化政策と鹿鳴館時代の幕開けを機に、外国への関心は大いに高まった。しかしながらここに描かれた世界旅行の案内は、いかなる知識に裏付けされたものであろうか。筆者が初めて本書に接したときに感じたのは、たとえば国内の鉄道網もまだ十分に整備されていない明治一〇年代という時期にすでに、日本語で世界旅行の案内書がすでに刊行されていたことへの驚きである。そこで次章では、「世界周遊旅行」という出来事の歴史的な系譜をたどり、同書刊行時の日本における世界周遊旅行のリアリティについて考えてみたい。

二 世界周遊旅行の系譜

フェルディナンド・マゼランが五隻の艦隊を率いてスペインのセビリアを出航し、およそ三年間の航海によって西回りで地球を一周したのは一五二二年のことであった。マゼラン自身は航海の途中で命を落とすが、これが歴史上初の世界一周航海であったとされる。この航海の成功によって「地球は周遊可能である」ことが実証され、一六世紀以降世界一周の航海は幾度も試みられた。一八世紀にはイギリスのジェームズ・クックやフランスのラ・ペルーズなどにより、また一九世紀には博物学者チャールズ・ダーウインを乗せたビーグル号などにより世界の周遊はなされてきた。これらの世界周遊は「発見」や「探険」そして「観測」が大きな目的とされてきた。ところが一九世紀中頃には、あたらしくつくられた海上の定期航路網や陸上の鉄道網を利用し、旅行案内書を手にした「ツーリスト」が、「娯楽」を目的として世界を移動するようになる。地表面を移動する方法と目的に大きな変革がみられ、世界はツーリズムの対象として再編成されていったのである。⁽⁸⁾

一九世紀におきた移動ネットワークの変革を具体的にみると、たとえば一八四〇年代にはヨーロッパとアメリカ大

陸とを結びつける大西洋の定期航路が開設され、一八五〇年代から六〇年代にはヨーロッパからアフリカ南端を経由して南アジアや東アジアへ向かう定期航路、そしてアメリカ大陸と東アジアを結びつける太平洋の定期航路が開設された。こうした海上の定期航路網を利用することで、地表面を移動することが容易になった。一八六九年にはアメリカ大陸の横断鉄道と、地中海と紅海とを結びつけるスエズ運河が開通し、陸上と海上の定期的な交通網を使って世界を一周する移動のネットワークが整い、世界一周旅行はもはや探険家でなくても手が届くようになったのである。

ちょうど同じ時期にはじまる万国博覧会においても、世界の周遊旅行を擬似的に体験しうる空間が用意された。一八五一年にロンドンで開催された万国博覧会とその後の多くの万国博覧会では、主会場に世界各地からの展示品が陳列され、世界の多様性を体験する場が娯楽として提供された。とりわけ一八六七年にパリで開催された万国博覧会での巨大な楕円形の主会場や、一八七三年にウィーンで開催された万国博覧会での円筒図法による世界地図を模した主会場などは、世界の周遊旅行を文字通り擬似的に体験できる空間でもあった。⁽⁹⁾

以上のように、物理的に世界を一周する移動のネットワークが形成されたことと、世界周遊旅行の擬似的な空間の出現に伴い、世界一周旅行が一般社会のなかでもリアリティを持つようになった。イギリスの旅行会社トマス・クック社では、アメリカ大陸の横断鉄道開通とスエズ運河の開通をうけて、世界一周の団体旅行を企画し実施した。それは一八七二年から翌七三年にかけて、二二二日間で世界を一周するパッケージツアーであった。⁽¹⁰⁾ この世界初の試みは成功し、翌年以降にも世界一周の団体旅行は実施されていく。また同じ一八七二年には、フランスのジュール・ヴェルヌによる新聞連載小説『八十日間世界一周』がはじまり、物理的な空間ばかりではなく、小説の空間においても、世界一周旅行が社会性を持つようになった。この時点においてすでにヨーロッパでは、世界一周旅行はパッケージツアーや小説のなかに、そして万国博覧会という縮図のなかに存在していた。つまり世界一周旅行は社会的な出来事と

してすでに生み出されていたのである。

イギリスやフランスにおいて一八七二年にはじまった「世界一周旅行」は、ほぼ同時代の日本にも接点を有していたのであった。前者の世界一周旅行では、オプショナルツアーという形で主催者のトマス・クック本人と一部の旅行参加者が日本の横浜に寄港した。一八七二（明治五）年一月のことであった。一方後者の世界一周旅行の小説は、一八七八（明治一一）年から一八八〇（明治一三）年にかけて日本語訳の刊行がなされた。

それでは日本を起点とした世界一周旅行はどのような状況であったのか。トマス・クック社とジュール・ヴェルヌによる世界一周旅行がほぼ同時に進行しつつあった一八七〇年代初頭、日本人による世界一周旅行も実は存在していた。それは、右大臣岩倉具視を特命全權大使とするいわゆる「岩倉使節団」であった。

岩倉使節団は、明治四（一八七一）年、旧暦の一二月二日、太平洋航路を最初に開設したアメリカ合衆国パシフィック・メイル社の定期船で横浜港からサンフランシスコを目指して出発した。サンフランシスコからは大陸横断鉄道でアメリカ東海岸へ至り、大西洋の定期航路を使ってヨーロッパへ渡った。ヨーロッパではイギリスをはじめとする一か国をまわり、帰路は地中海からスエズ運河を通過し、紅海、インド洋を経て、東回りで世界を一周し、出発からおよそ一年九か月かけて新暦の明治六（一八七三）年九月一三日に日本へ帰着した。岩倉使節団の世界一周旅行は、アメリカ大陸の横断鉄道やスエズ運河を利用しているという点で、同時代に最も相応しい周遊ルートを採用していると言える。

この世界一周旅行団には、のちに明治政府で中心的な役割を果たすことになる伊藤博文、大久保利通、木戸孝允などが含まれており、旅行の目的そのものも娯楽や遊覧ではなく、条約同盟国を歴訪し条約改正の予備交渉をすることや、欧米先進諸国を調査・研究することにあつた。この岩倉使節団の記録は、豊富な図版が盛り込まれ、久米邦武編

『米欧回覽実記』（全五編）として明治一一（一八七八）年に東京の博聞社から発行されている。同書は日本人によるはじめての世界一周旅行記録であり、世界一周旅行を追体験できる出版物でもあったと考えられる。

このように、トマス・クック社の団体旅行やジュール・ヴェルヌの小説による世界一周旅行とほぼ同時代に、日本人による世界一周旅行も実施されていた。しかしながら旅行の目的を考えるならば、岩倉使節団の世界一周旅行とトマス・クック社の団体旅行とを同列に扱うわけにはいかない。トマス・クック社の企画と同様の、日本を起点とした世界一周の団体旅行の実現にはこの時点からおよそ三〇年の時間が必要であった。

トマス・クック社による企画と同様の日本初の世界一周団体旅行は、明治四一（一九〇八）年に朝日新聞社が主催し、トマス・クック社が連携することで実現した⁽¹⁾。また世界一周旅行に関する初期の旅行記もほぼ同じ時期にみられる。たとえば五つの大陸を旅行した記録、中村直吉『五大州探検記』（全五巻、博文館）が明治四一（一九〇八）年から明治四五（一九二二）年にかけて刊行され、自転車による世界一周旅行の記録、中村春吉『中村春吉自転車世界無銭旅行』（博文館）が明治四二（一九〇九）年に刊行された。

以上をまとめると、『萬國名所圖繪』の刊行は、岩倉使節団の記録『米欧回覽実記』の刊行から七年後という時期にあたり、その意味では日本における世界一周旅行の草創期の出版物であると位置づけられるが、日本における一般的な世界一周旅行のはじまりを明治四〇年代と考えるならば、これに二〇年以上も先行するとも言える。つまり現実的な世界一周旅行の到来よりもずいぶん早い時期に『萬國名所圖繪』は刊行されたことになる。

そこで次に、同書全七巻を刊行した出版元についてみておきたい。

二 書肆・青木嵩山堂と編者・青木恒三郎

『萬國名所圖繪』は、同書の編者・青木恒三郎自らが明治一〇年代に大阪府下（後の南区安堂寺橋通四丁目）に開業した青木嵩山堂すうざんどうから発行された。青木嵩山堂は東京の日本橋通一丁目にも店舗を持ち、書物の出版・販売を行った明治期を代表する書肆の一つであった。文芸書や政治経済の書籍、哲学や宗教に関する書籍の出版や、中国・上海からのいわゆる「唐本」の輸入販売書店としてもよく知られていたという。明治二〇（一八八七）年に東京の本郷で開業し、戦前期における日本最大の出版社へと成長した博文館と並び称されることもあるが、⁽¹²⁾これはやや過大な評価であらう。

青木嵩山堂を創業した青木恒三郎（一八六三～一九二六）は、大阪の儒医で薬局を営んでいた上田文斎の三男であった。父の文斎は維新とも号しており、後述するように『内國旅行 日本名所圖繪』をはじめ青木嵩山堂から刊行されたいくつかの旅行案内書の著者とされている。恒三郎の長兄には洋雑貨商を営み京城（ソウル）に高級料亭「白水」を経営し、アマチュアの写真家でもあった野々村藤助があり、また次兄の上田貞治郎は大阪で上田写真機店を創業し、植民地を含む戦前期の日本を撮影し、数多くの写真コレクションを残した。また恒三郎の弟、上田寅之助（上田竹翁）は、写真技術に関する数多くの著作を残した戦前期の日本を代表する写真研究家である。このように恒三郎の兄弟たちは近代日本写真史に大きな足跡を残しており、恒三郎は風景を切り取る写真という技術と非常に近いところに身を置いていた。

次に青木嵩山堂から刊行された旅行案内書を一覽しておきたい。同書肆からは『萬國名所圖繪』の刊行後すぐに、

上田維暁『内國旅行 日本名所圖繪』（全七卷、明治二二（一八八八）年～明治三三（一八九〇）年）が、『萬國名所圖繪』とほぼ同じ体裁で刊行されている。両者に共通するのは、装丁、全七巻という巻数、書名、英文タイトルなどであり、『日本名所圖繪』は『萬國名所圖繪』の姉妹編として企画され刊行されたものと考えられる。『萬國名所圖繪』と『日本名所圖繪』は、同書肆におけるごく初期のしかももつとも規模の大きな旅行案内書の出版企画であったと考えられる。

青木嵩山堂から刊行された旅行案内書を一覧すると、先の二つの名所図会刊行後の明治二〇年代以降に、複数の出版をしていることがわかる。たとえば上田維暁『東京名所独案内』・『伊勢参宮名所図絵―東海道鉄道名所案内―』（いずれも明治二三（一八九〇）年）、青木恒三郎『清国名所図絵―内地旅行―』・『旅客必携支那内地案内』（いずれも明治二七（一八九四）年）、『韓国案内』（明治三五（一九〇二）年）、そして第四回内国勸業博覧会の開催に合作して刊行された『京都名所案内』（明治二八（一八九五）年）、同じく第五回内国勸業博覧会の開催に合わせて刊行された『大阪名勝―附・鉄道名勝案内』（明治三六（一九〇三）年）などである。したがってこうした一覧からも、『萬國名所圖繪』は『日本名所圖繪』とともに、青木嵩山堂にとってごく初期の、しかも同書肆を代表する旅行案内書であったと考えられるのである。

四 『米欧回覧実記』との類似性

本稿の第一章において『萬國名所圖繪』の「緒言」から引用したように、『萬國名所圖繪』の記述には「数多き引用書籍」が存在すると考えられる。現時点で筆者が確認できている「引用書籍」は、第二章において述べた岩倉使節

団の記録『米欧回覧実記』である。前述のように『萬國名所圖繪』の刊行は『米欧回覧実記』刊行のおよそ七年後であり、日本最初の世界一周旅行ともいえる岩倉使節団の記録がさまざまに参考にされた可能性は高い。ここでは両者の①編別構成と巻別構成の比較、②挿絵の比較、③本文の記述内容の比較という三点から『萬國名所圖繪』と『米欧回覧実記』の類似性を指摘したいと考える。

『萬國名所圖繪』の巻別構成はすでに表1で示したので、ここでは『米欧回覧実記』の編別構成を整理して表2に示したい。『米欧回覧実記』とは、「岩倉使節団が回覧した米欧一二か国と、当初予定していたが回覧を中止したスペイン、ポルトガル両国の略記等を含めた報告書が『米欧回覧実記』全一〇〇巻（五編五冊）なのである¹⁴」とされているように、五編構成で刊行された。また『米欧回覧実記』は日付が明記された旅行記録であり、岩倉使節団の行程に沿って編成されている。すなわち表2からその行程がうかがえるように、岩倉使節団はアメリカから大西洋を越えてイギリスに渡り、ドーバー海峡を越えてフランス北部（パリ）からベルギー、オランダ、ドイツ北部（プロシア）をまわり、ロシア、北欧のデンマーク、スウェーデン、そして再びドイツへ南下し、イタリア、オーストリア、スイスを通り、フランスのリヨンからマルセイユに南下し、地中海とスエズ運河を通過して日本へ向かっている。このように『米欧回覧実記』は岩倉使節団の旅程に沿って書かれているため、たとえばフランスの記述が第三編の

表2 『米欧回覧実記』の編別構成

	各編でとりあげられた地域	挿絵
第一編	アメリカ	59
第二編	イギリス	66
第三編	フランス（パリ）、ベルギー、オランダ、プロシア	65
第四編	ロシア、デンマーク、スウェーデン、南北ゲルマン、イタリア、オーストリア	86
第五編	スイス、フランス（リヨン・マルセイユ）、スペイン、ポルトガル	38

りと第五編のリヨン・マルセイユに分かれていてもある意味では不自然ではない。

さて、表2に示した『米欧回覧実記』の編別構成と、表1で示した『萬國名所圖繪』の巻別構成を比較してみると両者はたいへんによく似ていることがわかる。その対応関係をまとめたのが表3である。表3は『萬國名所圖繪』全七巻のうちアメリカとヨーロッパについて記された第一巻から第四巻までについて、『米欧回覧実記』との対応関係をまとめたものである。表3によれば『米欧回覧実記』の第一編から第三編はそのまま『萬國名所圖繪』の第一巻から第三巻に対応しており、『米欧回覧実記』の第四編は『萬國名所圖繪』の第三巻と第四巻に分割され、同様に『米欧回覧実記』の第五編は『萬國名所圖繪』の第二巻と第四巻に分割されたことが読み取れる。フランスの記述が一つの巻には収まらず二つの巻にまたがっていること、つまりリヨン・マルセイユとパリが別々の巻や編に収録されている点も共通している。

すなわち、『萬國名所圖繪』の構想そのものが『米欧回覧実記』を参考にして組み上げられたと考えられるのである。第一章で述べたように、『萬國名所圖繪』が当初は隔月刊行による全五巻構成として予定されていたことも、『米欧回覧実記』が全五編構成であることと無関係で

表3 『萬國名所圖繪』と『米欧回覧実記』との構成比較

『米欧回覧実記』	『米欧回覧実記』各編でとりあげられた地域	『萬國名所圖繪』
第一編	アメリカ	第一巻
第二編	イギリス	第二巻
第三編	フランス(パリ)、ベルギー、オランダ、プロシア	第三巻
第四編	デンマーク、南北ゲルマン	第三巻
	ロシア、スウェーデン、イタリア、オーストリア	第四巻
第五編	フランス(リヨン・マルセイユ)、スペイン、ポルトガル	第二巻
	スイス	第四巻

はないように思われる。

次に銅版挿絵に注目してみよう。『萬國名所圖繪』全七巻には八〇〇枚を超える銅版挿絵があることはすでに指摘したが(表1)、『米欧回覧実記』にも合計三〇〇枚を超える銅版の挿絵が挿入されている(表2)。『米欧回覧実記』の銅版挿絵は、使節団が現地で購入した写生画を模したり、なかには銅版画をそのまま復刻したものもあつたようである。この点について『米欧回覧実記』の「例言」には次のように記されている。「編中ニ銅版図ヲ出ス、無慮三百余図ニ及フ、皆各地各都ノ、矚目スヘキ風景建築等ニテ、文明諸国ノ一班ヲ国人ニ観覽セシメント欲スル意ニ出ツ、多クハ回歴ノ際、現地ニ於テ購ヒ得テ帰リシ、採影ヲ模シ、中ニハ銅版図ヲ復刻セルモアリ」⁽¹⁶⁾。すなわち『米欧回覧実記』に掲載された銅版挿絵の多くは、現地で作製された画像の複製であつた。

図4と図5は『米欧回覧実記』に掲載された三〇〇枚以上にのぼる銅版挿絵のうちの二枚である。図4は「新約克」⁽¹⁶⁾「ブロード、ウェー」ノ繁花」と題された銅版画で、アメリカ・ニューヨーク(新約克)のブロードウェイストリートの様子が描かれている。この図4を前掲図1と比較すると、両者は非常によく似ていることがわかるであろう。建築物の模様などの細かい部分に注目すると、図4のほうが図1よりも詳細で、両者の関係は図4がオリジナル、図1がその複製であると考えられる。同じような事例は、図5の「巴黎「コンゴルト」苑ノ「オプリスキ」塔」と前掲図2にもあてはまる。フランス・パリのコンコルド広場を描いた二枚の銅版画は、図5が建築物や人物の描写が詳細でありオリジナル、そして図2がその複製であると考えられる。

このように『萬國名所圖繪』に掲載された銅版挿絵の一部は、岩倉使節団の記録『米欧回覧実記』の銅版画を参照して複製されたと考えられる。オリジナルからの複製についてそれぞれの銅版画を数えあげると、『萬國名所圖繪』第一巻に掲載された銅版挿絵九三枚のうち三四枚が『米欧回覧実記』からの複製であると考えられ、以下同様に第二



図4 新約克「ブロード、ウェー」ノ繁花
『米欧回覧実記』より



図5 巴黎「コンゴルト」苑ノ「オブリスキ」塔
『米欧回覧実記』より

巻では八八枚のうちの三四枚、第三巻では一〇一枚のうちその半数以上にあたる五七枚、第四巻では一三五枚のうちの三五枚が『米欧回覧実記』の銅版画から複製されたものであると考えてよいであろう。これは『萬國名所圖繪』第一巻から第四巻に掲載された四一七枚の銅版画のうち一六〇枚（およそ四割）が、『米欧回覧実記』からの複製であったことを意味する。

最後に旅行案内の本文にみられる両者の類似性についても指摘しておきたい。図2と図5でとりあげたフランス・

パリのコンコルド広場とオベリスクについて、『萬國名所圖繪』と『米欧回覽実記』ではそれぞれ次のように記されている。

『萬國名所圖繪』…「コンコルドてふ公苑は凱旋門の正中よりシヤンセルゼーてふ廣街をすぎ、衝当なる彼のチユロリーの宮殿の前なる廣地を占め、苑中巨大の石盤の、中心より水を噴飛し、且石造の大像は、盤の傍に建立す、又此苑の中央の埃及國より遷したる、オプリスキてふ塔ありて、高さ二十六メートル⁽¹⁷⁾」

『米欧回覽実記』…「凱旋門ノ正中ヨリ、「シヤンゼルゼー」ノ広衢ヲスキ、其衝当ニ「チュロリー」宮アリ、宮門ノ前ニ、又一場ノ広区開ケルヲ、「コンゴルト」ノ苑ト云ウ、巨大ナル石磐ヲオキ、水ヲ噴跳シ、石雕ノ大像盤ヲ環シテ立ツ、中央ニハ埃及國ヨリ遷シタル「オプリスキ」塔ヲ建タリ、塔ノ高サ二十六「メートル」⁽¹⁸⁾」

ここでの記述内容においては、コンコルド広場とは凱旋門からシヤンゼリゼ通りをすぎ、その突き当たりにあるチユイリー宮の前庭であること、そしてそこには噴水や石像があり、中央にはエジプトから移築した高さ二六メートルのオベリスクが聳えていることが、全く同じように説明されている。すなわちコンコルド広場の項目においては、銅版挿絵のみではなく、文字による記述にも高い類似性が指摘できることになる。ただし、このような旅行案内本文の類似性は『萬國名所圖繪』全編を通じてのものではない。本稿ではその比較を全編にわたって行っていないため、ここでは一事例の指摘にとどめたいが、『萬國名所圖繪』第一巻から第四巻にいたるアメリカとヨーロッパの記述において、『米欧回覽実記』が主要な「引用書籍」とされたことは間違いない。

おわりに

以上のように本稿では、明治一八（一八八五）年から明治二〇（一八八七）年にかけて刊行された『世界旅行 萬國名所圖繪』をとりあげ、その概要の整理、同書刊行時の世界周遊旅行と同書の関係性、出版元の青木高山堂とその創業者青木恒三郎、そして同書と『米欧回覽実記』との類似性を指摘してきた。本稿でとりあげた『萬國名所圖繪』とその姉妹編『日本名所圖繪』とが、近世の旅行案内書（名所図会）から近代の旅行案内書へと移り変わる画期的な出版物として、今後さらに分析がすすめられることが必要であろう。

- 注(1) 『世界旅行 萬國名所圖繪』の復刻にあたって筆者はその監修と解題の執筆を行った。このことが本稿において『世界旅行 萬國名所圖繪』をとりあげる理由でもある。なお復刻版は、青木恒三郎編輯、荒山正彦監修（二〇一二）『復刻版 世界旅行 萬國名所圖繪 全七冊 付録 世界旅行 萬國全地圖』（合本全四巻）エディション・シナプス。
- (2) 復刻版は、第一巻（原本の一巻と二巻）、第二巻（原本の三巻と四巻）、第三巻（原本の五巻と六巻）、第四巻（原本の七巻）として合本されている。
- (3) たとえば熊田司（二〇〇四）『書物幻影―青木高山堂の刊本―』大阪人五八―一〇（四六―四七頁）をはじめ、簡易な紹介がみられる程度である。
- (4) 第一章以降の本文中において、同書本編を『萬國名所圖繪』、付録の地図を『萬國全地圖』と表記する。
- (5) 近世における名所図会と旅行については矢守一彦（一九八四）『古地図と風景』筑摩書房（三四三頁）が参考となり、また『都名所図会』をわかりやすく解説した書物として本渡章（二〇〇八）『京都名所むかし案内―絵とき「都名所図会」―』創元社（二五二頁）がある。

- (6) 「緒言」からの引用は一部を現代仮名遣いに改めた。以下同書からの引用も同様。
- (7) 近世末に日本で作製されたメルカトル図法による世界図については、京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編(二〇〇七)『地図出版の四百年―京都・日本・世界―』ナカニシヤ出版(一三三三頁)を参照のこと。
- (8) 園田英弘(二〇〇三)『世界一周の誕生―グローバルイズムの起源―』文藝春秋、二二二頁。
- (9) 吉田光邦編著(一九八五)『図説万国博覧会史―一八五一―一九四二―』思文閣出版、一九六頁。
- (10) ピアーズ・ブレンドン著、石井照夫訳(一九九五)『トマス・クック物語―近代ツーリズムの創始者―』中央公論社、六〇二頁。
- (11) 小林健(二〇〇九)『日本初の海外観光旅行―九六日間世界一周―』春風社、三八二頁。またこの団体旅行に参加した個人の記録として、野村みち(二〇〇九)『ある明治女性の世界一周日記―日本初の海外団体旅行―』神奈川新聞社、二六二頁。
- (12) 青木育志(二〇一〇)『青木高山堂の出版活動』、吉川登編著『近代大阪の出版』創元社、六九―九五頁。
- (13) 前者のタイトルは *Illustrated Guide Book for Travellers round the World*、後者のタイトルは *Illustrated Guide Book for Travellers around Japan* である。
- (14) 田中彰(一九七七)「解説 岩倉使節団と『米欧回覧実記』」、久米邦武編、田中彰校注『米欧回覧実記(一)』岩波書店、三九三―四二三頁。
- (15) 「米欧回覧実記例言」、久米邦武編、田中彰校注(一九七七)『米欧回覧実記(二)』岩波書店、九―二七頁。
- (16) 久米美術館編(一九八五)『特命全権大使『米欧回覧実記』銅版画集』久米美術館、二二〇頁から転載した。
- (17) 『萬國名所圖繪』第三卷、一〇―一頁。
- (18) 久米邦武編、田中彰校注(一九七九)『米欧回覧実記(三)』岩波書店、四六頁。